

読み替えられた詩人

——トラークル受容史におけるハイデガー「詩の中の言語」——¹

日名 淳裕

序——1950年代という歴史的文脈

ハイデガーの論文「詩の中の言語 ゲオルク・トラークルの詩の論究」(Die Sprache im Gedicht. Eine Erörterung von Georg Trakls Gedicht)² [以下「詩の中の言語」と略す]は1952年10月4日ビューラーヘーエにおける講演原稿がもととなっている。ハイデガーは思索家として多くの詩人に言及した。1930年代半ばから40年代にかけてはヘルダーリンを集中的に論じたが、第二次大戦後にはリルケ、ゲオルゲ、ベン、そしてツェランといった同時代の詩人へと対象を広げる。「詩の中の言語」はオーストリアの詩人トラークル(1887-1914)を論じたものであり、この流れに連なる。

また、この論文はハイデガーの公職復帰後最初に書かれたものの一つであり、50年代というハイデガー哲学の系譜において重要な期間の記録でもある。ところが、後期ハイデガー哲学は、ハイデガーと国民社会主義との関係から研究者に敬遠されがちであり、いまだ十分な議論がなされていない³。「詩の中の言語」もその例外ではないが、一方で文学者や現代詩人らには注目すべき影響を与えてきた。例えば、ハイデガーがトラークルの作品に見出したヘルメーティッシュな空間の系譜は、後にツェランを経てグリーンバインやトーマス・クリングといった90年代ドイツ語詩へと引き継がれてゆく⁴。またシュタイガーが「ゲオルク・トラークルの詩に寄せて」(Zu einem Gedicht Georg Trakls)を書くことで、メーリケの場合と同じく、ハイデガーの詩解釈に友好的な反論をしたことを指摘することもできるだろう⁵。

¹ 本稿は2010年11月25日のドクター・コロキウム発表「1950年代における抒情詩をめぐる議論——ハイデガー「詩の中の言語」を中心に——」の原稿に加筆したものである。

² テキストは Heidegger, Martin: Die Sprache im Gedicht. Eine Erörterung von Georg Trakls Gedicht. In: Gesamtausgabe. 1. Abteilung: Veröffentlichte Schriften 1910-1976. Bd. 12. Unterwegs zur Sprache. Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 1985, S. 31-78. を用いる。同論文からの引用は本文中に頁数のみを記す。

³ 斧谷弥守一: はじめに [『ハイデガーにおける「詩作と思索」——「被投性」の視点から——] 日本独文学会研究叢書 058, 2008] を参照。

⁴ Vgl. Korte, Hermann: Deutschsprachige Lyrik seit 1945. In: Geschichte der deutschen Lyrik. Stuttgart (Reclam) 2004, S. 652.

⁵ Vgl. Staiger, Emil: Zu einem Gedicht Georg Trakls. In: Euphorion. Zeitschrift für Literaturgeschichte. Bd. 55. Heidelberg (Carl Winter · Universitätsverlag) 1961, S. 279-296.

文学者に多くの読者を見いだした理由の一つは、「詩の中の言語」がトラークルの作品について書かれた論文の中では数少ない包括的なものであったことにある。確かに、よく言われるトラークルの詩の〈難解さ〉を体系的に説明しようとしたハイデガーの功績は大きい。しかし、ハイデガーが序文で提示した詩解釈の方法論は、文献学と哲学の境界をこえた〈問題〉を提起するものとなった。

ハイデガー自身が断っているように、この方法論は、トラークルの個々の作品がヘルメーティッシュな詩空間を形成するものであるという前提をもって初めて用いられるものなのだが、その前提はこの方法論に大きく依存している。このような〈循環〉は研究上の弊害として次の二つを引き起こす。一つは詩作品の意味するものを追うあまりに詩作品の音的構成が顧みられなくなることである。そしてもう一つは詩作品の音的構成の閑却と呼応するかたちで、詩人の〈個人性〉が閑却されることである⁶。前者は、世紀転換期文学における「音韻性の「詩的自我」にたいする優位と代替」⁷にトラークルの文学的功績を見ることを否定し、後者は、作者と作品がどのように関わっているのか、という文学にまつわる永遠の問いへの回答を放棄する。

以上のような問題意識のもとに、私はここでハイデガーの「詩の中の言語」がトラークル受容史に持つ意味を再検証しようとするのだが、その際に、この論文を 1950 年代という歴史的な文脈のなかに再度位置づけることから始めたい。1950 年前後は戦後の公職追放、虜囚、亡命を解かれた作家らが活動を再開した時期であり、彼らの作品には、過去とどのように向き合い、それをどのように現在ひいては未来へと連続させようのか、という問いが通底している。「詩の中の言語」もこのような歴史的な文脈に抗いがたく絡めとられており、それらを手がかりとしてハイデガーの論文を読み直すことができるのではないか。

以下、第一章では 50 年代の詩をめぐる議論を振り返るために、ギュンター・アイヒとゴットフリート・ベンの作品を分析する。二人とも戦前から作品を出版しているが、戦後の作風は以前のものとは変わった。その変化に戦後の西側知識人の思考モデルを探るのが目的である。続く第二章では、戦後のルートヴィヒ・フォン・フィッカーとブレンナー・クライスの活動を顧みる。生前からトラークルの紹介を独占的に行った雑誌『ブレンナー』(Der Brenner)における詩人像の変遷を追いつつ、戦後におけるチロル地方の文学サークルと哲学者ハイデガーの隠れた結びつきを指摘する。以上の議論を踏まえ、第三章では「詩の中の言語」をその序文を中心として精読し、この論文の詩解釈上の方法論を上述の同時代的な文脈から説明しようとする。

⁶ 古田裕清: ハイデガーの詩人解釈とツェラーン [『ツェラーンを読むということ 中央大学人文科学研究所研究叢書 39』中央大学出版部 2006、103-164 頁、137 頁]。

⁷ 拙論「ゲオルク・トラークルの散文詩の位置(1)」 [『詩・言語 73 号』(2010 年 10 月) 東京大学大学院・ドイツ語ドイツ文学研究会] 49 頁。

最終的な目標はもうすぐ一世紀の歴史を持つトラークル受容史に占めるこの論文の位置を確かめることである。

1. 凝視と超越

1. 1. アイヒ——世界を言語として見る決意

第二次大戦中にアメリカ軍の捕虜となったギュンター・アイヒは 1948 年に詩集『人里離れた農家』(Abgelegene Gehöfte)を發表する。そこに収録された詩「仮設便所」(Latrine)はアイヒの捕虜体験とそれを回想する戦後の現実感覚を巧みに描くとされる。

Latrine

Über stinkendem Graben,
Papier voll Blut und Urin,
umschwirrt von funkelnden Fliegen,
hocke ich in den Knien,

den Blick auf bewaldete Ufer,
Gärten, gestrandetes Boot.
In den Schlamm der Verwesung
klatscht der versteinerte Kot.

Irr mir im Ohre schallen
Verse von Hölderlin.
In schneeiger Reinheit spiegeln
Wolken sich im Urin,

>Geh aber nun und grüße
die schöne Garonne-<
Unter den schwankenden Füßen
Schwimmen die Wolken davon.⁸

仮設便所

⁸ Eich, Günter: Latrine. In: Gesammelte Werke Bd. 1. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1973, S. 36f.

臭う溝のうえに、
血と尿にまみれた紙、
キラキラ光る蠅に集られ、
わたしは蹲っている、

森の繁った岸辺を見る、
庭を、繫留されたボートを。
腐敗のぬかるみのなかへ
石のような糞が音をたてる。

みだれて わたしの耳のなかに響く
ヘルダーリンの詩行。
雪のように白い清らかさの
雲が映る 尿の中に。

»だが今は行け 行って挨拶を送れ
美しいガロンヌの流れに«
揺らぐ足の下で
雲が流れてゆく。⁹

この詩は一詩連四行に統一された全四詩連からなる。各詩行三ヘーブングを持つのは同じだが、ゼンクングの置き方はさまざまである。脚韻はすべて不完全であるが、奇数行はいずれも女性韻で偶数行は男性韻を形作っている。このように全体的に統一と不調和が混在していて不安定な印象を与える。第三詩連の「ヘルダーリン(Hölderlin)」と「尿」による脚韻がこの詩のクライマックスであることは、「仮設便所(Latrine)」、「尿(Urin)」、「蠅(Fliegen)」にも共通する母音 i と子音 l/r の組み合わせとそのヴァリエーションが作中に鏤められていることから分かる。

舞台は捕虜収容所に仮設された便所である。「わたし」はこの川辺（ガロンヌ）の便所に蹲っている。「わたし」の下には糞尿と汚れた紙の堆積がある。「わたし」の眼の先には川の流れをこえて木々の茂った岸が見える。そこにはボートが繋がれている。自らの糞が汚水を打つ音に誘われて下方を見ると、穴にたまった尿が鏡となって頭上の雲を映している。「わたし」はヘルダーリンの詩句を思い出す。川は穏やかで雲は白く清らかである。

簡単に解釈できる詩ではないが、戦争中にプロパガンダにも利用されたヘルダーリンが収容所便所の風景と重ねられることの意外性は否定できない

⁹ 最終詩連のヘルダーリンの詩句は川村二郎訳（『ヘルダーリン詩集』岩波文庫2002）を用いた。

だろう¹⁰。この詩には同じように、国民社会主義を揶揄するような言葉がいくつもある。第一詩連の「血と尿」は「血と大地」を連想させる。また「繫留されたボート」、「蹲る」という姿勢や「臭う墓／溝」などには敗戦の隠喩を見つけることができる。単純に読めば、汚物とヘルダーリンの対照が際立ち、現実を前にした美しい詩句の無力が曝されているのだと理解できる。ヘルダーリンの詩を諷する「わたし」が収容所の共同便所の中で悪臭を我慢しながら惨めに蹲っており、この屈辱の中でかつて称揚された価値の没落を冷笑的に言葉で確かめているのだ、と。また、「乱れて わたしの(*Irr mir*)」という言葉はヘルダーリンの狂気を連想させつつ、すでに指摘した母音 i と子音 r の組み合わせを繰り返すことで現在の「わたし」の不安定を効果的に表している。

ヘルダーリンの詩の響きは便所に音をたてる自らの糞と対応し、尿面に映る白い雲はそれでも美しい。この詩には内容における美しいものと醜いものの対照と、形式における統一と不調和の対照がある。というよりも、詩全体がこの二つの対照そのものを問題化しているのだが、解釈はこれをどのように捉えるのかによって決まるだろう。異なる二つの要素は争っているのか、併存しているのか、引用される詩句は揶揄されているのか、それとも愛でられているのか。確かに、この詩に没落した諸価値への軽侮がないとは言えない。しかし、アイヒがこの軽侮に陶醉しているようには見えない。現実の醜悪に動揺しつつも、それを言葉でなぞり、それを不完全ながら<韻律>という規則の中に回収してゆく作業、そこにアイヒの極度に醒めた視線、<凝視>を感じとることができる。

同じようなことが詩「棚卸し」(*Inventur*)についても言えるだろう。こちらは、虜囚の生活にあって乏しい所有物を数えあげ、ひとつずつ名付けてゆく詩である。ここにも、「これが... (*Dies ist...*)」という繰り返される提示表現などの統一性と、ゼンクングの置き方の恣意性や表現そのものの平板さといった不調和の対照が見られる。また、<詩>と所有物の対照(第六詩連)もあり、そこに「仮設便所」と同じくアイヒの詩論を読み込むことができるのだが、詩句が現実には優位する、あるいはその逆といった価値の転換は見られない。

こうして最終詩連の汚物の堆積と清浄な雲の描写には、二つの対照への<凝視>を見るべきである。アイヒが引用するのはヘルダーリンの「回想」(*Andenken*)第一詩連の詩句であるが、この象徴的な詩句の挿入によって汚物と詩句の対照は、現実と記憶のそれへと広がりを持つ。つまり、汚物を受け止める紙と排泄物の関係は、パピルス紙片と脳髓の排泄するヴィジョンの関係へと。

アイヒは 1956 年のエッセイ「現実を前にした作家」(*Der Schriftsteller vor*

¹⁰ Hölderlin-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Hrsg. v. Johann Kreuzer Stuttgart・Weimar (J. B. Metzler) 2002, S. 484.

der Realität)の中でも「仮設便所」で表現した自らの詩論を語り直している。アイヒは「わたしは現実であるところのものを知らない」という認識から出発する。「わたしたちの感覚は疑わしい。そして脳髄も疑わしいと思う」¹¹。この懐疑主義があらゆる価値の没落という限界状況の経験に起因することは明らかだ。ただアイヒはこの価値の空白を絶望や闘争といった能動的反応で満たすことはしなかった。ただそれを見つめ、紙の上になぞる。「書くことによって初めてわたしに対し事物は現実を獲得する。現実はわたしにとって前提ではなく目標である。わたしはそれをまず生み出さねばならない」¹²。アイヒにとって現実と詩は対立しているのではなく分ちがたく結びつけられている。詩が目的なのではなく、詩を書くことによる現実への働きかけが目的であるのだ。彼はみずからを「詩人(Dichter)」とは言わなかった。「わたしは作家(Schriftsteller)である、それは単に職業であるのみならず、世界を言語として見る決意である」¹³。こうしてアイヒは敗戦という現実をあくまで認識のレベルで問題とした。

1. 2. ベン——言葉、精神のファルス

国民社会主義の時代と占領期にわたって二度の執筆禁止令を課されたベンは、1948年の『静学的詩篇』(Statische Gedichte)とともに沈黙を破り、50年代の詩壇に華々しく返り咲いた¹⁴。ここでは「失われた自我」(Verlorenes Ich)という詩を参照したい。

Verlorenes Ich

Verlorenes Ich, zersprengt von Stratosphären,
Opfer des Ion-: Gamma-Strahlen-Lamm -,
Teilchen und Feld -: Unendlichkeitschimären
auf deinem grauen Stein von Notre-Dame.

Die Tage gehn dir ohne Nacht und Morgen,
die Jahre halten ohne Schnee und Frucht
bedrohend das Unendliche verborgen -,
die Welt als Flucht.

¹¹ Eich, Günter: Der Schriftsteller vor der Realität. In: Gesammelte Werke Bd. 4. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1973, S. 441-442, (hier S. 441.)

¹² Ebd.

¹³ Ebd.

¹⁴ Vgl. Benn, Gottfried: Büchnerpreis Rede. In: Gesammelte Werke in der Fassung der Erstdrucke. Bd. 3. Hrsg. v. Bruno Hillebrand. Frankfurt am Main (Fischer) 1989, S. 537-540.

Wo endest du, wo lagerst du, wo breiten
Sich deine Sphären an -, Verlust, Gewinn -:
Ein Spiel von Bestien: Ewigkeiten,
an ihren Gittern fliehst du hin.

Der Bestienblick: die Sterne als Kaldaunen,
der Dschungeltod als Seins-und Schöpfungsgrund,
Mensch, Völkerschichten, Katalaunen
Hinab den Bestienschlund.

Die Welt zerdacht. Und Raum und Zeiten
und was die Menschheit wob und wog,
Funktion nur von Unendlichkeiten -,
die Mythe log.

Woher, wohin -, nicht Nacht, nicht Morgen,
kein Evoe, kein Requiem,
du möchtest dir ein Stichwort borgen-,
allein bei wem?

Ach, als sich alle einer Mitte neigten
und auch die Denker nur den Gott gedacht,
sie sich den Hirten und dem Lamm verzweigten,
wenn aus dem Kelch das Blut sie rein gemacht,

und alle rannen aus der einen Wunde,
brachten das Brot, das jeglicher genoß-,
oh ferne zwingende erfüllte Stunde,
die einst auch das verlorne Ich umschloß.¹⁵

失われた自我

失われた自我, 成層圏に破碎された,
イオンの犠牲—: ガンマー光線—子羊—
素粒子と域—: 無限のキマイラが
ノートルダムの おまえの 灰色の石のうえに.

¹⁵ Benn, Gottfried: Verlorenes Ich. In: Gesammelte Werke in der Fassung der Erstdrucke
Bd. 1. Frankfurt am Main (Fischer) 1982, S. 309f.

日々は おまえにとって 夜も朝もなく すすむ、
年月は雪も果実もなく とどめるのだ
脅かしつつ 無限を 隠されたままに—
逃亡としての世界を。

どこに おまえは終わり、どこに おまえは 横になり、どこに
おまえの 圏域を広げるのか —喪失、獲得—
獣の遊戯：永遠、
その格子のもとで おまえは 逃れる。

野獣の眼差し：臍物としての星々、
存在と創造の基底としてのジャングルの死、
人間、民族虐殺、カタラウヌの野
野獣の顎をくだる。

世界は思考に砕かれた。そして 空間と時間
そして 人類が織り 量るもの、
ただ無限のみによる働き—
神話は欺く。

どこから、どこへ —夜でなく、朝でなく、
頌歌でなく、鎮魂歌でなく、
おまえは 標語を借りようとする—
しかし 誰のもとで？

ああ、みながひとつの中心に傾いだとき
そして また思索者らがただその神に思いをこらしたとき、
かれらが 牧者らとその子羊に 分枝したとき、
聖杯からの血がかれらを清めるたびに、

そして みなが ひとつの傷口から流れ、
各々が味わう そのパンを裂いた—
おお 遠方へと強いる充足した 時よ、
かつてはまた 失われた自我をも包摂していたのだ。¹⁶

この詩は各詩連四詩行、それが八連からなる。五ヘーブングのヤンプスが基本で、ところどころ転置強音したり、ヘーブングが二つに減少したりすることで詩のリズムを作っている。脚韻はすべて交差韻に統一され、行内韻を

¹⁶ 訳出する上で生野幸吉訳と内藤道雄訳を参照した。

多く駆使する非常に技巧的な詩である。例えば、第一詩連冒頭の「ガンマー光線—子羊—(*Gamma-Strahlen-Lamm*)」という表現は注目に値する。「ガンマ」と「光線」の結びつきは容易に理解されるが、なぜここに「子羊」という語が継がれるのか。同じ詩行にある「犠牲」という語を受けている、あるいは第七詩連の宗教的な描写を準備しているのだと言えればそれまでだが、並べられた三つの名詞に共通する母音 a と子音 m の連なりにもその理由は求められる。また「イオン(*Ion*)」や「素粒子(*Teilchen*)」といった、従来およそ詩的であると考えられなかった物理学の専門用語や「無限(*Unendlich*)」、「喪失(*Verlust*)」、「獲得(*Gewinn*)」といった抽象的な語が好んで用いられている。タイトルと同じ「失われた自我」という語で始まり、「失われた自我」という語で終わるところに誇示される自己完結性は、第四詩連が「野獣の眼差し(*Bestienblick*)」で始まり、「野獣の顎(*Bestienschlund*)」で終わるところにも繰り返されている。この詩では、語り手が詩的自我である自らに二人称「おまえ」でもって呼びかける点にも特徴がある。呼びかけられる詩的自我は空間的には「成層圏(*Stratsphäre*)」、「ジャングル(*Dschungel*)」、「ノートルダム(*Notre-Dame*)」、「カタラウヌの野(*Katalaunen*)」を旅し、時間的には神話や古代にまで自由自在に現れる。その活動はまさに「無限」とされて不思議はない。こうした派手な言葉と状景の目まぐるしい変化の中に語り手の非常な高揚感が込められている。

この詩は 1951 年 8 月 21 日マールブルク大学で行われた講演「抒情詩の諸問題」(*Probleme der Lyrik*)で展開されたベンの特異な詩学の実践として読むことができる。そこでベンは「抒情詩にとって抒情詩人以外の対象は存在しない」¹⁷と宣言する。そのため詩はもっぱら抒情詩人=詩的自我の描写と定着に向かう。ベンによると「詩的自我は砕かれた自我である、逃亡を経験し、悲しみに捧げられた、格子の自我(*ein Gitter-Ich*)である」¹⁸。さらに「この詩的自我は夢想家でもなく美学者でもない、また過去の時代の怖いもの知らずや<ティタンの子孫>にも比較されない——ある特殊な、なかば火山活動、なかば無気力から生まれた衝動をもった小市民であり、沈黙して、社会の側はまったく関心を示さず、また社会に対して関心を起こすこともなく、ただ彼の<モノローグ芸術>のためにのみ生きる」¹⁹。

これらの説明から感じられるのはベンの激しく緊張した心理である。例えばこの説明は、表現主義時代のベンの代表作である 1912 年の詩集『モルグ』(*Morgue*)に収録されている詩「小さなアスター」(*Kleine Aster*)や「ニグロの花嫁」(*Negerbraut*)には当てはまらないだろう。なぜならこれらの詩において執拗に描かれる死体は行き詰まった近代における新たな抒情の発見であり、決して「モノローグ芸術」ではなかったからだ。ベンが溺死したビール

¹⁷ Benn: *Probleme der Lyrik*. In: *Gesammelte Werke* Bd. 3. S. 505-535, (hier S. 517).

¹⁸ Benn, a. a. O., S. 519.

¹⁹ *Kindlers Neues Literatur Lexikon*. Bd. 2. Hrsg. v. Walter Jens. München (Kindler) 1989, S. 520.

運搬人や轢死した黒人を捉える眼ざしは恋人を愛撫する手つきに例えることもできる。『モルグ』から『静学的詩編』へのベンの変化は何なのか。ここには、二度の戦争体験が影響している。そしてそれはベンの思想によるよりも、国民社会主義への期待と失望、妻の死、祖国の敗戦といったものに傷つき疲れた詩人の感情によるだろう。「抒情詩の諸問題」の中でも「言葉(das Wort)」を「精神のファルス(der Phallus des Geistes)」として称揚し、揺るがない<民族性>を喧伝する点には、国民社会主義時代の芸術観の名残が垣間見える。傷ついたベンにとって、いや傷つき多くを失ったからこそ、詩は特権的であらねばならず、何ものによっても脅かされてはならない。そこから執拗な自己完結性の追求が始まる。詩は「絶対詩(das absolute Gedicht)」とされ、「信仰のない詩、希望のない詩、何者にも向けられない詩(das Gedicht, an niemanden gerichtet)、あなたが熱狂して据える言葉から生まれる詩」へと変貌する。

しかしこの大きな変化をベン自身は常に意識していた。それは「抒情詩の諸問題」のもう一つの試み、「新しい抒情詩(Die neue Lyrik)」の系譜の記述から分かる。ベンはマラルメを「作詩の現象学(Die Phänomenologie der Komposition)」の始祖と位置づけ、大陸横断的にフランス、アメリカ、ロシア、イギリス、ドイツの詩人らをその概念のもとに結びつける。その際にベンが提唱するのが方法論「技巧／曲芸(Artistik)」である。ベンは言う、「技巧／曲芸(Artistik)は、内容の一般的な凋落のなかでみずから内容として生き残り、この経験からある新しい様式を造形する芸術の試みである、それは価値一般のニヒリズムに対してある新しい超越、創造的欲求の超越を据える試みである」²⁰。「技巧／曲芸」という方法論は、語り方は違うにしろゲオルゲにも見られた芸術至上主義のベンによる語り直しである。詩集『モルグ』が示すように、詩人としての出発においてベン自身はボードレールに影響を受けている。そしてボードレールの影響は彼が属した世代、表現主義全般について当てはまる。したがってベンがここで行っているのは、——1923年の文章を自己引用することにも明らかなのだが——現在からの過去の語り直しである。またベンが「抒情詩の諸問題」で試みたことは、抒情詩というジャンルに関わらず広く戦後ドイツにおける精神的文化的連続性のモデルを提示することであった。ベンがあらためて自己同一化するところの表現主義、それを国民社会主義が頹廢的であるとして排斥した時に、そこに希望を見いだしたのはむしろアドルノら少数の亡命作家であった²¹。従って、ナチに加担しつつも戦後に生き延びたベンがここに古典的モデルネを引っ張り出すのは奇妙である。なぜそこまで連続性に固執したのか。ベンが50年代の詩壇に返り咲くこと自体が政治的な出来事であった。同様のことは、ベンについてはあまり論じることがなく、逆に「傲慢」と一刀両断したハイデガ

²⁰ Benn: Probleme der Lyrik. S. 510.

²¹ Vgl. Adorno, Th. W.: Spengler nach dem Untergang. In: Prismen. Kulturkritik und Gesellschaft. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1969, S. 51-81, (hier S. 81).

ーがトラークルの詩を取り上げるときにも当てはまることだ²²。

2. 詩人の使命——ブレンナー・クライスとハイデガー

アイヒとベンを例にして見たように 50 年代の詩をめぐる議論は、戦後の空白期を経て活動に復帰するときにも必然的に突きつけられる、過去をどう捉えるかという問題と切り離せない。その答えは多様である。ここで取り上げたアイヒ、ベン、ハイデガーは戦争に積極的に関わり、戦後は西ドイツを中心に活動をした。この三人に共通するのはこの時期に〈詩〉を問題化したことであり、それが何らかのかたちで 20 年代の文化的営為に関わっていることである。すでに論じたように、アイヒ、ベンは自身が詩人であり戦前から詩を発表していた。しかし、なぜこの時期に哲学者のハイデガーがオーストリアの詩人トラークルに言及するのだろうか。双方を結びつけるものは何なのか。それを探るために以下に、20 年代にかけて〈詩人トラークル〉というイメージの形成を主導したブレンナー・クライスとハイデガーのつながりを考えることとする。

トラークルは 1914 年 11 月 3 日に出征したクラカウの病院で死亡した。死因は心臓麻痺とされたが、直接の原因は薬物の過剰摂取であり、戦地において情緒不安定であったことなどからも自殺と見なされてきた。彼の遺体を最初に確認したのは同じく東部戦線に赴いていたヴィトゲンシュタインであり、これが二人の最初で最後の出会いとなった²³。遺体はゲオルク・フランクル、37 歳という誤った名前と年齢でその地に埋葬されたが²⁴、1925 年にルートヴィッヒ・フォン・フィッカーによってインスブルックのミュラウ墓地に移された²⁵。トラークルの死後にフィッカーが急いだのは、作品のブレンナーによる管理²⁶と〈詩人トラークル像〉の確立であった。その際に利用されたのがドイツの詩人の系譜であり、そこにトラークルを結びつけることで表現主義という〈前衛〉から選別した²⁷。こうしてフィッカーと機関誌

²² Vgl. Heidegger-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Hrsg. v. Dieter Thöma unter Mitarbeit von Katrin Meyer und Hans Bernhard Schmid Stuttgart · Weimar (J. B. Metzler) 2003, S. 317.

²³ ヴィトゲンシュタインはトラークルに匿名で 10 万クロネを寄付していた。

²⁴ Basil, Otto: Georg Trakl. Hamburg (Rowohlt) 1999, S. 156.

²⁵ 先に言及したクリングは、このエピソードを題材にして詩を書いている。Kling, Thomas: *mühlau*, † In: *Gesammelte Gedichte*. 1981-2005. Hrsg. v. Marcel Beyer und Christian Döring. Köln (DuMont) 2006, S. 269.

²⁶ カール・レック編纂の『作品集』(Die Dichtungen)は第三者によってトラークルの全集が公刊されることへの対抗であった。Röck, Karl: Über die Anordnung der Gesamtausgabe von Georg Trakls Dichtungen. In: *Erinnerung an Georg Trakl. Zeugnisse und Briefe*. Salzburg (Otto Müller) 1959, S. 211-235, (hier S. 211f.).

²⁷ 〈詩人トラークル像〉定立の最初の試みは『ブレンナー 年鑑 1915』(Brenner-Jahrbuch 1915)におけるトラークルの追悼である。Vgl. Sauer mann, Eberhard: Das

『ブレンナー』周辺の文学者らによってとりわけヘルダーリンとの類縁性が強調されることとなった。

メトラグルは、その研究史においてトラークルが「ヘルダーリンの使節(*der Abgesandte Friedrich Hölderlins*)」というおざなりの評価を半世紀にわたって受け入れてきたことを振り返りつつ、「リルケとは異なり、トラークルがヘルダーリンを研究したという自伝的な証拠は、レックによる簡潔な日記の記述をのぞいて存在しない」という基本的な事実が見落とされていることを指摘する²⁸。それ以外にも、1913年7月6日のフィッカー宛てカール・ダラーゴの手紙の中に、フィッカーがトラークルとヘルダーリンの「本質的な近さ」を指摘したことを示す件がある²⁹。興味深いことにダラーゴがこの見解に反論をしている。このやり取りからは、フィッカーの発言が当時の文学的雰囲気起因していることが分かる。つまり、ブレンナー・クライスによるトラークルの発見は、ヘリングラードらによるヘルダーリンの文学的評価の確立と並行している³⁰。メトラグルはこうした事実をふまえて、ヘルダーリンの延長線上にトラークルが位置づけられたのは「もっぱら文学的、学問的な作品受容の成果」によると主張する³¹。この〈造られた系譜〉を受けて、ラッハマンは「トラークルとヘルダーリン」(*Trakl und Hölderlin*)や『十字架と夕暮れ』(*Kreuz und Abend*)などで、両者の作品を具体的に比較した³²。後のベッシェンシュタインらによる詳細な研究はここに始まるものである。同様のことはラインホルト・グリムによるランボーとの比較にも当てはまる。ともにトラークル研究史において初歩的前提とされているが、もとをただせばそれもまたひとつの解釈であるということは念頭に置く必要がある。

そもそもこのようなブレンナー・クライスのイデオロギーを代表したのがダラーゴである。ヤニクは同じように、なぜハイデガーがトラークルを論じ

„Brenner-Jahrbuch 1915“ und seine Rezeption. Trakl-Verehrung oder Kriegsgegnerschaft? In: *Mittbrenner Archiv* 20. Innsbruck (Brenner-Forum und Forschungsinstitut Brenner-Archiv) 2001, S. 35-55.

²⁸ Methlagl, Walter: „Versunken in das sanfte Saitenspiel seines Wahnsinns . . .“ Zur Rezeption Hölderlins im „Brenner“ bis 1915. In: *Untersuchungen zum „Brenner“*. Festschrift für Ignaz Zangerle zum 75. Geburtstag. Hrsg. v. Walter Methlagl, Eberhard Sauermaun u. Sigurd Paul Scheichl. Salzburg (Otto Müller) 1981, S. 35-69, (hier S. 37). 問題の箇所は、Röck, Karl: *Tagebuch 1891-1946*. Hrsg. u. erl.v.Christine Kofler. Bd. 1. Salzburg 1976. S. 168.

²⁹ von Ficker, Ludwig: *Briefwechsel. 1909-1914*. Hrsg. v. Ignaz Zangerle, Walter Methlagl, Franz Seyr, Anton Unterkircher. Brenner-Studien Bd. 6. Salzburg (Otto Müller) 1986. S. 171ff.

³⁰ ヘリングラードもトラークルと同じく戦死した。そこから推測が働いたのか、1916年5月の『フランクフルト新聞』(*Frankfurter Zeitung*)に掲載された『ブレンナー 年鑑 1915』の書評の中でもトラークルとヘルダーリンの類縁性を指摘する箇所がある。Sauermaun, a. a. O., S. 45f.

³¹ Methlagl, a. a. O.

³² Vgl. Lachmann, Edeuard: *Kreuz und Abend. Eine Interpretation der Dichtungen Georg Trakls*. Salzburg (Otto Müller) 1954.

たのかという疑問を抱き、その答えとして、自伝的に裏付けられるかどうかは問題としないと断りつつも、初期ブレンナー・クライスの代表的思想家ダラーゴと、1911年から1954年の廃刊にいたるまで『ブレンナー』の定期購読者であったハイデガーの思想的つながりを推測する³³。その際にヤニクが両者の共通点として指摘するのが<郷土性>である。ダラーゴにとってのチロル地方は、形骸化したカトリック道徳の支配する墮落した都市とは根本的に異なる<場所>を意味した。ハイデガーもまた生涯を通じて故郷メスキルヒ近郊から離れることがほとんどなく、その思索においては<場所>というものを問題としつづけた。ハイデガーが一読者として『ブレンナー』に掲載されたダラーゴの思想とそこから解釈される<詩人トラークル>を知っていたことは確かだ。1949年にダラーゴは死去し、1952年にビューラーヘーエにおける講演でハイデガーとフィッカーは対面する。ハイデガーは1958年に講演で訪れたウィーンからの帰途に、フィッカーの案内でトラークルの墓を訪れる³⁴。このような事実もあって、ヤニクの推測は興味深い。しかしヤニクは、ハイデガーがまさにこの時期にフィッカーと接触した真相については言及しない。

1946年には、戦争による12年の中断を経て、第十六期『ブレンナー』が刊行されている。その冒頭にはトラークルの名と生没年が記され、「思い出の詩 (Gedichte zur Erinnerung)」という標題の下に三篇の詩が再掲載されている。「夕暮れの国の歌」(Abendländisches Lied)、「魂の春」(Frühling der Seele)、「別れを告げた者の歌」(Gesang des Abgeschiedenen)である³⁵。最後の詩の終わりにイタリックで但し書きが付され、それぞれの初出年月が指示されている。すでにトラークルの死からおよそ三十年が経っている。第二次大戦も終わったばかりの混迷期であり、雑誌の雰囲気は回顧的である。しかしここで『ブレンナー』が企図するのは単なる過去への追想ではない。それは<詩人トラークル>の再解釈に託された、ブレンナー・クライスの歴史に対する見解の表明でもある。

同じ号にツァンゲルレの「詩人の使命」(Die Bestimmung des Dichters)という論文が掲載されている。ドップラーによると、そこでトラークルはドイツの詩人像の系譜にあらためて継がれる。ツァンゲルレはハーマンやヘルダーの詩人論にまで遡りつつ、<詩人の使命>は「失われた楽園の繰り返し沈んでゆく思い出のイメージ」を「見る」ものだと述べる³⁶。また、「詩人は創造、救済、変容の連続において展開される聖なる出来事の意味をわたしたち

³³ Janik, Allan: Carl Dallago und Martin Heidegger. Über Anfang und Ende des „Brenner“ In: Untersuchungen zum „Brenner“. S. 21-34, (hier S. 21).

³⁴ 1948年にはツェランが同様にトラークルの墓を訪れている。

³⁵ Der Brenner. Hrsg. v. Ludwig von Ficker. Sechzehnte Folge 1946. Autorisierter Nachdruck Nendeln · Liechtenstein (Kraus Reprint) 1969, S. 11-13.

³⁶ Vgl. Doppler, Alfred: Georg Trakl als Vorbild für die Bestimmung des Dichters im „Brenner“ nach 1945. In: Untersuchungen zum „Brenner“, S. 122-129.

に伝える者である」³⁷。こうした議論の中でトラークルはあらためて「詩人」というアイデアの鋳型へとはめ込まれてゆく。「失われた楽園」、「創造、救済、変容」といった大げさな言葉は詩人を極端に理想化する。ブレンナー・クライスの期待に合致しないトラークルの作品は公表されず、しばしば都合良く読み替えられてゆく³⁸。例えば、アルコールと薬物の常用、実妹しか愛さなかった社会の落伍者という否定的側面は、「世界の苦しみにたいする緩和剤、[...] 孤独、引き渡されてあること(Ausgelierfertheit)、犠牲に供されてある存在の表現」へと化粧をほどこされる。このような再解釈はトラークルの「詩人」としての自己完結性を強めていった。

もうひとつ第十六期『ブレンナー』で注目されるべきことがある。それは冒頭に掲げられた三篇の詩である。いずれの詩も「詩の中の言語」の中で特別に引用解釈されている。「魂の春」は「地上にあって魂は異質なもの(Es ist die Seele ein Fremdes auf Erden.)」という詩行を含んでいて、この詩行の徹底的解釈からハイデガーのトラークル論は始まる。そこでトラークルの全作品は「別れを告げた者(Der Abgeschiedene)」の彷徨と見なされる³⁹。第三章では「夕暮れの国の歌」にある「ひとつの種族(E i n G e s c h l e c h t)」という語が論じられる。

以上のことから分かるのは、1946年の第十六期『ブレンナー』を機に、ブレンナー・クライスがトラークルの再解釈に乗り出したことである。そしてそのような詩人の読み替えがブレンナー・クライスそのものの歴史にたいする理解を映して来た。つまり、1915年の『ブレンナー 年鑑 1915』における戦争詩人の称揚(軍服姿の肖像写真がそれを物語る)、1925年の遺骸の移送とその報告、第二次大戦後の「詩人」としての確立、そして1954年の第十八期『ブレンナー』における「詩の中の言語」への言及と「ブレンナーの終わり(Ende des Brenners)」という宣言は、トラークルが「詩人」として「詩の中の言語」へと変わる経緯の記録でもある。つまり、それぞれの時代状況によってその方向を異にしつつも、纏綿と紡がれてきたブレンナー・クライスのトラークル理解は、ハイデガーへの言及でもって終わったと言える。

3. 「詩の中の言語」のもつ問題

以上のようにいくつかの視点を手がかりとして「詩の中の言語」もまた歴史に絡め取られたテキストであることが示された。

先に引用したヤニクは、「詩の中の言語」はハイデガーの哲学を表すもの

³⁷ a. a. O., S. 124.

³⁸ Vgl. a. a. O., S. 129, Anm. 9.

³⁹ Heidegger, a. a. O., S. 48.

であり、そのため文献学的評価をするのはそもそも見当違いだと主張する⁴⁰。同じような議論はハイデガーによる一連のヘルダーリン講義にも当てはまるのだが、ヤニクがあくまで哲学の自律性に固執する理由はいわゆる「ハイデガーの 1933 年における過ち」に求められる。例えば、1958 年の「ヘーベル 家の友」(Hebel Der Hausfreund)が、ヘーベルを「血と大地の作家」として曲解しているという非難は、「ハイデガーの 1933 年の行動を、多くのハイデガー研究者の間では常識となっているように過ちであったとは見なさ」ないことによるだけだと、ヤニクは批判する。「(ハイデガーの) 文学を扱った作品は普通の意味での文学研究ではけっしてない」。しかし少なくとも「詩の中の言語」に関しては、ハイデガーのテキストがトラークル受容において持った大きな影響を考慮する必要がある。ドイツ語圏のみならず日本においても 50 年代以降、このテキストによってドイツ文学研究におけるトラークルへの関心があらためて高まったことは否定できない。

以下に、ハイデガーの「詩の中の言語」を精読する。その目的は、ハイデガーが論文の中で用いた特殊な方法論を第十六期以降の『ブレンナー』におけるトラークル再解釈の文脈において分析し、いかなる〈語り替え〉をトラークルが被ったのか、そしてその〈語り替え〉が意味するものを追求することである。

3. 1. Zwiesprache

この論文は序文と三つの章から成り立っている。すでに述べたように、この三章構成は第十六期『ブレンナー』に掲載されたトラークルの三篇の詩になぞらえられている。これらの詩を選択したのはフィッカー及びブレンナー・クライスであるので、これだけでもハイデガーとの深い結びつきが分かる。1954 年の『ブレンナー』最終号のあとがきは、ハイデガーの「詩の中の言語」に言及している。それを手がかりにすれば、ブレンナー・クライスがこの論文をどのように読んだのかを知ることができる⁴¹。

そこには 1952 年 10 月 11 日付けミュンヘン『新-新聞』(Neue Zeitung)紙上に掲載されたクレメンス・グラーフ・ポージェヴィルスによる要約が転載されていて、ブレンナーの理解はこれにそっている。ポージェヴィルスによると、ハイデガーは「詩人、賢者、敬虔な者は存在者の中に現れる秘密を解く近さへと到る」ものであるが、哲学者や学者は彼らを論ずることで「解釈の解釈」に陥ると考える。しかしそれは概念への退行を意味し、詩的に獲得されたものを壊してしまう。ハイデガーは「詩の中の言語」で「集まるものとしての場所、詩の場所性」を求めることで「場所を開く(er-ört-ern)」ことを試みる。

⁴⁰ Janik, a. a. O., S. 31ff.

⁴¹ Der Brenner. Achzehnte Folge 1954 Hrsg. v. Ludwig Ficker. Autorisierter Nachdruck. Nendeln · Liechtenstein (Kraus Reprint) 1969, S. 281f.

しかし、この詩は生涯を通じて詩人が語らなかつたものであり、個々の作品はまさにこの詩に由来する。詩との本来的な「対話(Zwiesprache)」はただ詩作するものとのみ行われるべきなのであるが、時には「詩作(Dichten)」と「思索(Denken)」の対話も必要とされる。双方はたしかに異なるものなのだが、言語に関わるという点で一致する。この対話(Gespräche)は言語の本質を呼び出し、言語の中にふたたび「住む(wohnen)」ことを学ぶことを目指す。このような対話(Zwiesprache)は「耳を傾ける(Hören)」に及ぶものではなく、「詩作する発言(das dichtende Sagen)」が静けさから歌うのを妨げる恐れをもつものである⁴²。

内容的に「詩の中の言語」序文に関わる部分はこのようにまとめられている。つづいて第一章から第三章の要約が示された後に、ブレンナー・クライスからのコメントがある。しかし、ヘルダーリンと結びつく「穏やかな狂気(sanfter Wahnsinn)」という語の解釈も、「今現在が加算しうる形で延長されたもの」としての未来を否定し、「運命の到来(die Ankunft eines Geschicks)」を構想する点など、いずれもハイデガーの哲学をなぞるものにとどまる。ただ、「トラークルが夕暮れ、精神の夜と原初、死と復活、死ぬことと生まれていないことを往還する」詩人であるという主張が、ハイデガーの考える「時間」と合致するものだと考えるところにわずかな独自性が見られるのみである。こうして「そのような思索と詩作の対話から、たとえそれが「耳傾ける(Aufhören)」瞬間には忘れ去られるとしても、一度限り打ち立てられたもの、詩が生き生きとした光力とともに現れ出することは、またブレンナー・クライスの視点からも諾われる」と記し、ハイデガーのトラークル理解への同意を表している。こうしてハイデガーの「詩の中の言語」は、詩人の存命中から特権的に作品を紹介してきた、いわばトラークルについての<権威>であるブレンナー・クライスからお墨付きをもらった。

いくつか問題となる点がある。まずポーデヴィルスによる要約の中で用いられている「対話」という語は Zwiesprache と Gespräch の二つであるが、両者は区別なく用いられている。しかし、ハイデガーが用いたのは Zwiesprache のみであり、他の作品の使用例と比較すればそれが選択された語であることが分かる⁴³。「詩の中の言語」原文では、「思索(denken)」と「詩作(dichten)」の関わりが述べられる箇所に注意深くこの語が用いられている。

一人の詩人の詩との本来的な対話(Zwiesprache)はただ詩を書く [対話:筆者] だけである、すなわち詩人のあいだの詩作的対話である。(S. 34.)

⁴² Ebd.

⁴³ 同じく『言葉への途上』に収録されている「言語に関する対話から ある日本人と問う者の間に交わされた」(Aus einem Gespräch von der Sprache. Zwischen einem Japaner und einem Fragenden 1953/54)では Gespräch が用いられている。

Zwie-は語源的には「二重の、二度現れる、二倍の」を示すが、時として「ばらばらに、引き裂かれた、片割れ、分たれた、揺らいでいる」⁴⁴をも示す。そこから、Zwiespracheは「(内的に行われる) たいていの場合現前しないあるパートナー、したがって自分自身と話すこと」⁴⁵とされる。ここで強調したいのは、ハイデガーが自らの試みを「対話」として説明する時に Dialog や Gespräch という語ではなく、Zwiesprache を用いたということである。Dialog は「話し合い、言葉のやり取り、対話(Unterredung, Wechselrede, Zwiesgespräch)」を意味する⁴⁶。したがって、Zwiesprache という語には、Dialog などのもつ他者とのコミュニケーションという要素が希薄で、「自分自身と話すこと」とあるように、同じ対話を意味するにしても<問答>のようなモノログ的側面が強いものだと言えるだろう。この語の選択が即座にハイデガーのトラークルに対する評価を反映しているのかどうかは断言できないが、ブレンナー・クライスはこれに注意を払っていない⁴⁷。

Zwiesprache という語の選択は、同じく序文にある「論究(erörtern)」という語の説明と関係している。ハイデガーは論文の副題にあるように、トラークルの詩の場所(Ort)を開く(Er-)ことが論文の目的であると言う。ハイデガーによると「あらゆる偉大な詩人はただひとつの詩からのみ詩作する」が、それは「語られずにとどまる」。この「ただひとつの詩」が詩の「場所」である。なぜ「場所」が問題になるのかというと、それが「ゲオルク・トラークルの詩作する語りをその詩へと集める」からだとされる。こうして、「論究はゲオルク・トラークルについてただ論究がかれの詩の場所を考量する(bedenken)という方途においてのみ語る」。ハイデガー哲学全体における「場所」についてここで議論することはしないが、「詩の中の言語」序文で語られる「論究」とその目指す「ただひとつの詩」という考えの強調は、トラークルの作品そのものを遠景化する。つまり「場所」そのものがトラークルの個々の作品に優位するのだが、それをハイデガーは<循環>によって説明する。「ただひとつの詩」は語られることがないので、詩の「場所」を「論究」するには個別の作品の「解明(Erläuterung)」が必要である。しかし「解明」は「論究」を前提としている。したがって、「論究と解明の間の相関関係にひとりの詩人の詩とのあらゆる思索する対話(Zwiesprache)はとどまる」。ハイデガーの語りは巧みである。まず Zwiesprache という語が表すのは、「場所」をめぐる循環に「とどまる」ということ、つまり弁証法的な「対話」は

⁴⁴ Etymologisches Wörterbuch des Deutschen M-Z. 2. Auflage, durchgesehen und ergänzt von Wolfgang Pfeifer. Berlin (Akademie) 1993, S. 1630.

⁴⁵ Ebd.

⁴⁶ Etymologisches Wörterbuch des Deutschen. A-L. 2. Auflage, durchgesehen und ergänzt von Wolfgang Pfeifer. Berlin (Akademie) 1993, S. 222.

⁴⁷ レイはこの語の選択に注意を払う数少ない論者の一人である。Vgl. Rey, W. H. : Heidegger-Trakt: Einstimmiges Zwiesgespräch. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. Hrsg. v. Hugo Kuhn und Friedrich Sengle. Bd. XXX. Stuttgart (Max Niemeyer) 1956, S. 89-136.

もとよりなし得ないという考えである。さらにこの問いに始まり、問いに終わる循環に「対話はとどまる」とされるのは、それが詩人と「思索」の「対話」という、詩人同士の「対話」に本質的に劣るものだからと説明する。すなわち「論究」は「ひとりの詩人の世界観を表すのでもないし、かれの仕事場を吟味するのでもない。詩についての論究はとりわけ詩作品に耳を傾けること(das Hören)の代わりとはなりえないし、それを導くことさえできない」。

ハイデガーは、「論究」に対しては「解明」が必要であるとし、それらは「耳を傾けること」より劣ると言う。「論究」という語に潜む「場所」への指示とは異なり、「解明」には「音(Laut)」への指示がある。「耳を傾けること」には及ばないながらも、個々の作品が持っている「音」にハイデガーはひどく気を使っている。序文の最後に、具体的な方法の道筋を提示するにあたって再びハイデガーは「場所」に対する「音」に留意する。

ここにいたって私たちは語られた作品から出発しなければならない。問いは残っている、どの作品からか。トラークルの作品の各々が、互いに似ていず、形を異にしているとしても、詩のひとつの場所を指し示していることは、その詩のひとつの基調音に由来する、諸作品間の他に比べようのない一致が示している。／ここにおこなったその場所を指示することはとにかく、いくつかの詩連、詩句、文からの選択でもって間に合わされねばならない。それが恣意的に見えることは避けようがない。しかし選択は、眼差しが跳躍するように注意を詩の場所へと向けるという意図からなされている。

(S. 35.)

ここでハイデガーはトラークルの個別の作品の質的相違にも言及している。とくに「形を異にしている」や「詩連、詩句と文」などと作品のフォルムとジャンルの多様性を認めているのである。しかしそれはトラークルの詩の「場所」を示すためには犠牲にされざるをえない。そのようなことが可能なのか、という疑念に対してハイデガーが最後のよりどころとするのは、トラークルの作品のもつ「他に比べようのない響き」、すなわち「ひとつの基調音(Ein Grundton)」である。

3. 2. Laut— 個人性をあらわす音

最終的にハイデガーが自身の方法論を正当化するために言及する<トラークルの音色>という考えはハイデガー特有のものではない。例えば 1917年に出版された最初の全集『作品集』を編纂したレックが、既発表作品をテーマ別のツィクルス構造に並べ替える際に前提としたのも全作品を貫く<トラークルの音色>である。ハイデガー自身が註で指示しているように、「詩の中の言語」はこの『作品集』を一次文献として用いている。

トラークルの作品は抒情詩のみに限らない⁴⁸。またハイデガーは抒情詩と同じく散文詩も論文中に引用しているが、それは散文詩の韻文化を主張したラッハマンの解釈と似ている。詩にしても「滅び」(Verfall)のようなソネット形式で書かれたものから「ヘーリアン」(Helian)のような完全な自由韻律詩まであり、たとえ「ひとつの基調音」がそれらを一貫しているのだとしても一括りにすることは難しい。また創作の初期と後期に多く書かれた戯曲や散文からの引用にいたっては全くない。したがって「ひとつの基調音」という表現そのものが論文中の作品の選択を前提としている。

さらに作品の引用方法も問題である。第一章には以下のような箇所がある。

異郷者の歩みは夜の銀色の輝きと響きをとおって鳴っている。ある他の詩(104)は歌っている、

そして聖なる青のうちに光り輝く歩みは鳴りわたる

他のところ(110)では青について以下のように述べている、

...青い花の聖なるものが... 見るものの心を動かす

ある他の作品(85)は言う、

...ある獣の顔が
青の その聖性をまえにしてこわばる⁴⁹ (S. 40.)

このようにハイデガーは作品名を伏せて異なる詩行からの引用を羅列するのだが、引用される詩行のうちでも必要箇所以外はハイデガーにより省略されている。この引用箇所は「青(Bläue)」という語を説明するものである。しかしこれはもはや引用ではなく、詩句の「暴力的な」加工と見なされても仕方がない⁵⁰。そしてその際に最も損なわれるものが、作品の<音韻性>である。上の引用箇所にある「そして聖なる青のうちに光り輝く歩みは鳴りわたる(Und in heiliger Bläue läuten leuchtenden Schritte fort)」という詩行は、第二詩集『夢のなかのゼバスティアン』(Sebastian im Traum)の冒頭を飾る「幼年時代」(Kindheit)の第13行、全5詩節(4-3-3-3-4)の詩の中心詩節(-3-3-3-)の最後に位置する。また **Bl-äu-e**、**l-äu-ten**、**l-euch-ten-d-en** という連続する三つの語のつくる行内韻がこの詩行を特徴づけており、その音の結びつきは他の

⁴⁸ 拙論「ゲオルク・トラークルの散文詩の位置(1)」および「ゲオルク・トラークルの散文詩の位置(2)」 [『詩・言語』74号(2011年3月) 東京大学大学院・ドイツ語ドイツ文学研究会所収] を参照。

⁴⁹ 引用文中の括弧内の数字は『作品集』の頁数を示す。

⁵⁰ Rey, a. a. O., S. 98.

詩行にある「青」という語とよりも強い。

これら<音韻性>は、ハイデガーが序文に示した詩に対する考えと衝突する。ハイデガーが「あらゆる偉大な詩人はただひとつの詩からのみ詩作」し、なおかつその「詩」は「語られずにとどまる」と言うとき、作られたものとしての<音韻性>はすでに作品から捨象されている。ハイデガーは「詩人の仕事場」には関心がないとも言うが、作品から「仕事場」を、そしてそれをもって「作者」を切り捨てるのが作品の加工を可能にするのである。同じく論文中に引用される有名な詩「グローデク」(Grodek)はトラークルが従軍した東ガリチア戦線で書いたものである。すなわち、表題は「場所」ではなく、なによりもまず具体的な土地を示す。ハイデガーはこの詩をトラークルがキリスト者ではなく「夕暮れの国の詩人」であった証として<読み替える>。すなわち、トラークルは自らの死を意識する絶望の縁にあってキリストに呼びかけていないと。また最終詩行に記される「生まれぬ孫たち(Die ungeborenen Enkel)」という言葉は、戦場に倒れた世代の子孫ではなく、「夕暮れの国の詩人」とやがて訪れる「原初」の間の断絶を意味するという。このようにハイデガーは解釈するが、<音韻性>としてこの詩に通底している母音 O が、詩人の感情の直接的表出でもあり、トラークルにとっては一回的でしかありえなかった「グローデク」という戦場の名の音による反復であることに想像力を働かせようとはしない。

レイが指摘しているように、このようなハイデガーの解釈の根底にあるのは彼の歴史にたいする理解である⁵¹。ハイデガーの考える「歴史」は *Geschichte* であり、*Historie* ではない。*Geschichte* は出来事の年代記的経過ではなく、「存在の運命(das *Geschick des Seins*)」である。<詩人の使命>は聖なるものの歌い手であることであり、詩人は「世界の夜(*Weltnacht*)」という「深淵」を苦しむがゆえに、「新しい日」を歌によって人類に告げ知らせる。

トラークルの「もっとも内なる非歴史性(*innerster Geschichtslosigkeit*)」についてよく語られる。この判断における「歴史(*Geschichte*)」とはいったい何か。その名がただ「歴史(*Historie*)」を、つまり過ぎ去ったもののイメージを意味するならばトラークルは非歴史的である。かれの詩作(*Sein Dichten*)は歴史的な(*historischen*)「対象物(*Gegenstände*)」を必要とはしない。なぜ必要としないのか。かれの詩(*sein Gedicht*)は最高度の意味において歴史的(*geschichtlich*)だからである。かれの作品(*Seine Dichtung*)は人類をそのなお残されている本質へと打ちつける、つまり救済する一撃としての運命(*Geschick*)を歌う。(S. 76.)

ここでハイデガーが名指すところの「トラークル」とは、「過ぎ去ったもののイメージ」を漉しとられた「トラークル」である。その姿は 1914 年に

⁵¹ a. a. O., S. 101ff.

クラカウの病院で誰一人として知友に看取られることもなく死に、フランクという他人の名前で埋葬されたというエピソードを思い起させる。トラークルは「歴史的な対象物」を必要としなかったのではない、それを見いだすことができなかった。トラークルは「歴史的な対象物」、意味の喪失の中で<音韻性>に固執した。そこに私たちは「かれの詩(Sein Gedicht)」の「運命」をではなく、彼の「わたし」の最後のよりどころを見る。

4. 結語

ハイデガーの文学論には文献学者の側からの賛辞や批判がいつも付きまとう。あるいはハイデガー自身が「語られたものの中に語られなかったものを読み取る」という方法論の説明を、至る所で意識的に繰り返すことで彼の方法論についての論争を煽ったと見ることもできるだろう⁵²。ファルクはレイの試みを興味深い但不毛であると述べたが⁵³、両者の共通点として双方がハイデガーとトラークルについて論じつつもハイデガーとブレンナーとの関わりには言及していないことを指摘できる。それは、ハイデガーの文学論と普通の文献学の本質的相違が自明とされてきたことによるだろう。しかし、トラークルにもハイデガーにもオーソドックスな理解を示すファルクがそれに言及しなかったことは諾われても、ハイデガーを根本から批判したレイがブレンナーとの隠れた結びつきを指摘しなかったのは意外である。それは **Zwiesprache** という語の使用や<歴史>に対する理解にこそ「詩の中の言語」の限界があると見抜いていただけになおさらである。

アイヒ、ベン、ブレンナー、ハイデガーのいずれもが西ドイツ、オーストリアで活動した。それとは異なった時間の流れた東ドイツで活動し、1980年代に包括的なトラークル論を書いたフューマン、作中にその影響を探ることのできるキルシュ、アメリカにとどまり『美学論』(Ästhetische Theorie)などでトラークルを論じたアドルノ、あるいはより複雑な文脈に位置するツェランによる受容については今後の課題としたい。

⁵² a. a. O., S. 98ff.

⁵³ Falk, Walter: Heidegger und Trakl. In: Literaturwissenschaftliches Jahrbuch Hrsg. v. Hermann Kunisch Neue Folge/Vierter Band 1963, Berlin (Duncker & Humboldt) S. 191-204. (hier S. 204. Anm. 25).

Der umgeschriebene Dichter

—*Die Sprache im Gedicht* in der Rezeptionsgeschichte Georg Trakls—

Atsuhiko HINA

Martin Heideggers Aufsatz *Die Sprache im Gedicht. Eine Erörterung des Gedichts Georg Trakls* (1953) zielt auf die systematische Erklärung des Gedichttraums bei Trakl. Ihn nennt Heidegger den „Ort“, und seine These ist es, dass alle einzelnen Gedichte schließlich auf „das eine Gedicht“ hinweisen. Dieses einzige Gedicht, von dem allein alle großen Dichter singen, klar zu machen und zu nennen, ist dem Philosophen zufolge die wichtigste Aufgabe.

Heideggers Aufsatz hat seit seiner Veröffentlichung großen Einfluss nicht nur auf der philosophischen, sondern auch auf der literarischen Ebene ausgeübt. Dabei entsteht immer das Problem, ob der Aufsatz im eigentlichen Sinne überhaupt von Trakls Werken handelt. Einige Interpreten halten ihn für ein Werk, das unter die Philosophie Heideggers eingereiht wird, und behaupten, dass man in ihm keine Trakl-Interpretation suchen soll. Aber ich wage doch zu fragen; warum gerade Trakl? Die Verbindung zwischen dem österreichischen modernen Dichter und dem deutschen Philosophen bleibt ungeklärt.

Um diese Frage zu beantworten, beziehe ich mich im Besonderen auf die verborgene Bindung Heideggers an die Tiroler Literaturgruppe. Der Brennerkreis, dessen Leiter Ludwig von Ficker auch der finanzielle Förderer Trakls war, veröffentlichte ausschließlich dessen Gedichte in seiner Zeitschrift *Der Brenner*. Nach dem Tod Trakls fing der Brennerkreis an, ihn als Dichter zu schätzen. Heidegger war ein Abonnent dieser Zeitschrift und sein Aufsatz beruhte maßgeblich auf diesem Trakl-Verständnis. Aufgrund dieser „Kooperation“ wurden die Gedichte Trakls in den fünfziger Jahren neu vorgestellt und interpretiert.

Hinter diesem Versuch steht zudem eine explizite Rückbesinnung auf die historische Situation, die durch den Zweiten Weltkrieg stark geprägt worden ist. In allen literarischen Werken, die nach dem Krieg verfasst wurden, kann man eine gemeinsame Linie finden. Um sie etwas genauer zu untersuchen, gehe ich besonders auf Günter Eich und Gottfried Benn ein. Beide sind als Dichter schon vor dem Krieg tätig gewesen und der Charakter ihrer Werke verändert sich danach deutlich.

Bei der Analyse ihrer Werke ist es mein Ziel, die zeittypische Denkweise heraus- zuarbeiten.

Im Anschluss daran analysiere ich den Aufsatz Heideggers erneut in Bezug auf zeitgenössischen Kontext der 50er Jahre. Durch diesen Ansatz möchte ich die starke Bindung zwischen dem Philosophen und dem Brennerkreis in der spannenden und spannungsreichen Situation nach dem Krieg hervorheben. Auch im Text kann man einen Beweis dafür finden. Mein Aufsatz gliedert sich daher in ein Vorwort und drei Unterabschnitte. Jeder der drei Abschnitte konzentriert sich auf ein Gedicht; *Frühling der Seele*, *Gesang des Abgeschiedenen* und *Abendländisches Lied*. Sie wurden nicht von Heidegger ausgewählt. Im *Brenner 16. Folge* wurden diese drei Gedichte von Ludwig von Ficker zur Erinnerung an den Dichter neu aufgelegt. Heidegger nahm in seiner Trakl-Interpretation bewusst eben auf diese Gedichtauswahl Bezug, nachdem der Dichter nach seinem Tod immer wieder je nach der Zeit neu interpretiert worden ist.

Bei der Analyse von Heideggers Aufsatz achte ich besonders auf ein Wort, das Heidegger mit der außerordentlichen Sorgfalt einsetzt: „Zwiesprache“. Etymologisch gesehen, bedeutet dieses Wort Entzweiung und es hat im Vergleich mit Synonyma wie „Dialog“ oder „Gespräch“ monologischen Charakter. Dem entnehme ich, dass gerade diese Wortwendung die so genannte hermetische Interpretation vertritt. Man zielt nur auf die Entschlüsselung des Gedichtsraums von Trakl und ignoriert dabei oft die Lautgestalt seines Gedichts. Aber ich betone umgekehrt gerade dieses Merkmal seiner Lyrik und halte es für das wichtigste literarische Verdienst Trakls: Es geht ihm nicht mehr um die Bedeutung, sondern um die Lautgestalt. Die Neigung, der Bedeutung zu entfliehen, ist auch schon den Expressionisten gemeinsam und beweist, meiner Meinung nach, Trakls Geschichtlichkeit.

Schließlich möchte ich noch eine andere Möglichkeit der Trakl-Interpretation erwähnen. In der DDR wird die erste Ausgabe Trakls 1975 von den Schriftstellern Stephan Hermlin und Franz Fühmann herausgegeben. Daneben verfasst Fühmann auch einen umfangreichen Trakl-Essay, dessen Titel *Vor Feuerschlünden eine Erfahrung mit Georg Trakls Gedicht* heißt. Mein nächster Aufsatz soll sich mit diesem bisher noch nicht genügend wahrgenommenen Aspekt der Dichtung Trakls beschäftigen.